29 高砂尉嫗立像

一対

大正十三年（一九二四）
陶磁
（尉）一三・六×一六・六×三一・〇　（姥）一〇・九×一〇・〇×二八・九

尉、嫗（姥）ともに面長の皺深い顔の表現や腰の曲がった様子、着物の重なりなど、細部まで丁寧に成形された萩焼の高砂置物。同じ萩焼でも《萩焼寿老人置物》（作品番号26）の箆あとの残る粒子の粗い質感とは対照的に、表面は平滑に処理されて底面以外には透明釉がたっぷりと掛かり、全体に滑らかで光沢のある仕上がりになっている。灰色がかった青磁釉を基調とし、ところどころに焼成時の変化によるほのかな薄桃色を呈する火色が斑状にあらわれている。尉の持つ熊手、嫗の持つ箒は、それぞれ竹と藁を用いて作られている。大正十三年（一九二四）の皇太子（昭和天皇）御結婚の折、山口県阿武郡萩町長北野右一より献上された。

30 高砂置物

森田清一

一対

昭和五十九年
（一九八四）頃
木彫
（尉）高三〇・五
（姥）高二七・八

クス材一木造りの高砂の置物。素木の仕上げ、一部に金箔が散らされている。昭和五十九年（一九八四）に昭和天皇の御結婚六十年をお祝いして実業家、弘世現より献上された品である。いずれの像にも底裏には、緑青を沈めた「清一」の刻銘がある。

作者の森田清一（一九三一～九三）は、富山県砺波市庄川町の出身。隣接する南砺市井波町は、江戸時代より社寺彫刻の技術者集団の存在によって北陸一帯を中心に関東まで、井波彫刻としてその名を知られていた。伝統的な木彫技術は今もなおこの地に継承され、欄間彫刻や衝立、パネル、獅子頭、置物などの室内装飾品が作られており、技術者の中には作家として日展等で活躍する者も多い。この井波の木彫技術を身に付けた森田は、昭和三十二年に初めて日展への入選を果たし、昭和五十二年とその翌年には特選を受賞、昭和六十年には日展会員に推挙された。

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

寿ぎの品々を読み解く
三の丸尚蔵館展覧会図録No.75

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社　東京美術
翻訳　黒川廣子
発行　宮内庁
平成二十九年一月七日発行

© 2017, The Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan